

21、(浮世物語による)

篠田村のだれそれという者が、住吉神社にお参りして帰るときに、道のそばで美しい女に出会った。

あれこれと親しく語り合つて、夫婦となり、故郷(篠田村)に帰つてから年月が経つたときに、(その女、妻が)一人の子どもを生んだ。

その子どもが五歳の時に、母親に抱かれていたとき、

(その母親の腰に) しつぽが見えたので、

(母である女は) これをきまり悪く思つて、

もとの狐の姿になつて、篠田の杜に身を隠してしまつた。

夫は、ここ数年、仲むつまじく暮らしてきたので、

それ(女が狐)と分かつていても、やはり名残惜しく思つて次のように歌を詠んだということだ。

子どもを思う闇の夜ごとに(私のもとを)訪ねてきてくれはしないか。昼間は篠田の杜に住んでいようと(あなたがこども)のことを思うあまりに、悲しみ惑う夜には訪ねてきてくれ)と詠んで、(男が)泣いていたのを、妻である狐は立ち聞いて、非常に悲しいと思ひながら、窓を隔てたところで次のように言つたのだつた。

(あなたと交わした夫婦をしての愛情が忘れられないで)

私は篠田の杜で堪え忍び啼きます

と詠んだのだつた。

それから、夫は、田畑をつくつた。

(すると)狐(妻の狐)が来て、夜の間にも苗を植え、水を(田に)入れ、草を刈ることを続けた。

毎年豊作になつたので、(男の)家は大きな富を得て栄えたということだ。

22、(今昔物語集による)

その後、またも天皇がお負けになつて、寛蓮(かんれん)がその金の枕をいただいて宮廷を出ようとした時、以前のようになつて若いたくさんの殿上人(てんじょうびと)天皇にお仕えする者達)が寛蓮を追いかけて金の枕を奪い取ろうとする時に、寛蓮は懐(ふところ)から枕を取り出して、后町(という建物)の井戸に投げ入れたので、殿上人たちは皆その場を去つていった。

寛蓮は、殿上人達が帰つたのでうまくいったと思つて上機嫌になつて帰つて行つた。

その後、殿上人達が井戸に人を降ろして(寛蓮が投げ入れた)枕を取り上げて見てみると、それは木で作つたものであり、金箔を押ししたものであつた。

何と本物の枕は寛蓮が持つていってしまったのであつた。

寛蓮はそのような(偽物の)枕を用意して自分が持つていたものを井戸に投げ入れたのであつた。

そうして、その枕を少しづつ打ち砕いて、仁和寺という寺の東のあたりにある弥勒寺というお寺を造つたのであつた。天皇も「実にうまくやつたものだ」とお笑いになられた。

23、(戴音記による)

昔、張騫が黄河の源流を極めようとして舟に乗り、三年ほど河を上ると、一人の織女に出会った。

「ここは、何という所ですか。」と問うと、「あなたは、何の用でたずねるのですか。」と答えた。

張騫が、「この河の源流を極めたい。」と言うと、織女は少し笑いながら、「ここは天の川の最初の船着き場です。ここから源流まで上るのはとても困難です。」と言うと、張騫は驚き、布織機の支え石をもらい、そこから引き返した。

ある人が、天を見上げ、「今夜は、織女星のそばに見慣れない星がある。」と言ったのは、あの張騫が天の川に至った夜に当たると。

24、(金子吉左衛門、耳塵集から)

ある役者が藤十郎丈に尋ねました。

「私も他の人も、初日というときとせりふも十分に覚えていないためか、とまどってしまうのです。」

あなたは、十日も二十日も芝居を演じ慣れたように見えるようです。どのような心構えがあるのか教えていただきたい。」

答えて言うには、

「私も、初日は、同じく、とまどってしまいます。けれども、

他人の目には、演じ慣れた狂言をするように見えるのだとしたら、稽古の時には一生懸命せりふを覚えておいて、初日には、すべて忘れて舞台で相手のせりふを聞いて、その時思い出してせりふを言うのです。その理由は、日ごろ人と寄り集まり、

時には口喧嘩するとき、前もって、せりふの準備はないという事です。相手の言う言葉を聞いて、こちらも初めて返答が浮かぶものです。狂言は日常を手本とするものだと思うから、稽古の時は一生懸命覚えて、初日には忘れて出るのです。」

ということですが

25、(大鏡による)

醍醐天皇の御治世の時に、古今集を選定遊ばされた時に、貫之は言うまでもなく、忠岑や躬恒などは、御書所に呼ばれなされて参上した時に、四月二日だったので、まだホトトギスが本格的に鳴き出す前の時節に、並々ではなく面白がっていらつしゃいます。

貫之をお呼びよせになって、歌をお詠ませになった。

こと夏は いかが啼きけむ 時鳥

この宵ばかり 怪しきぞなき

(これまでの夏にはどんな風に啼いていたのでしょうか、ホトトギスよ、今夜のお前の声ほど不思議に心を惹かれる事は無い)

それをすばらしい事と存じたのに、同じ時、

音楽の遊びがあった夜、御前(醍醐天皇)の階段の下に躬恒をお呼び寄せになり、

「月を弓張という心(意味・道理?)は、何の心か。この訳を

歌に詠め」と御言葉があつたので、

照る月を 弓張としも いふことは

山辺をさして いればなりけり

(輝く月を特に弓張月というわけは山辺を矢で射るように入るからです)

と申し上げるのを、尋常ではなく感動なされて、

大桂をお与えになつて、肩にさっとかけるとすぐに、

白雲の このかたにしも おり居るは

天つ風こそ 吹きてきぬらし

(白い大桂が手前の肩におりてきたのは、

天の風が吹いたからでしょう)

すばらしい詠み振りですね。

躬恒のように身分の低い者を近くにお呼び寄せになつて

天皇じきじきの褒美はするはずではない事だけれど、

非難申す人が無いのは、君(天皇)が尊くいらつしやつて、

また躬恒が和歌の道に世間から高く認められているからと思つております。

26、(花月草紙による)

「この筆は大変良くない。三回、四回使うと、筆の穂先が全てすり切れた状態になった。」と言つて、急いで文書を書くときに、(新しく) 墨もすらないで、硯の(溜めてあつた古い) 墨の中をめぐらして、(文書) を書き終えれば、(その辺に) なげおくと、硯や秘閣の間などに横たわっている。

そのうちに毛先も釣り針の様になつて、乾いている(筆)を、また(使うときに)、惜しくもなく硯の干潟のあたりに立てて、音が出るほどめぐらしたり(叩いたり)、あるときは歯を使つて(毛先を) かみ碎き、またあるときは墨を使つて毛先を押し広げて書いた。

このような扱いではどうして(筆の) 命が長くもつだろうか？

(いや、長持ちしたいのは当然だ)

良い筆と言うもの(を使うとき) はまず(筆用の) かさの着脱できえも丁寧に扱う上に、文書を書いたあとでも(穂先を) 洗つて、紙におしあてて(水分をふき取り)、またはすかして見て、(穂先を) 一筋も乱すまいとしておくだろう、(そうすれば) たいそう長持ちするものは(当然の) 道理だ。

早く痛んでしまうだろうと思う筆を、ひどくあらつぽく扱つて(だめにしてしまつてから) 「この筆をご覧下さい。三回、四回の使用でもうこんなに(だめに) なつてしまつた。」というのも、変なものだ